

アジア女性資料センター
「ジェンダー視点から平和活動に取り組む若い世代のリーダーシップ育成」
最終報告書

活動の目的

平和で公平な社会をつくるためには、人権とジェンダーについて深い理解をもち、国内外の社会活動に積極的に参加できる若い世代のリーダーシップ育成が不可欠である。平和な社会づくりの担い手となる若い世代の女性たちが人権問題について学び、行動する力をつけることを目的としたユースプログラムを実施する。

活動の内容と方法

第1に、20～30代の女性たちが、人権やジェンダー問題を共有し、これからの平和な社会づくりへ積極的に関わるきっかけを作るため、身近な問題について気軽に学び、話し合うことのできる空間作り「ジェンダーカフェ」を実施する。

第2に、国際的な平和への課題と女性の人権について理解を深め、国際的に活動する力を高めるため、英語で学習するトレーニングセミナーを開催する。

第3に、学びを実際の活動に生かす実践力をつけるため、11月25日～12月15日に世界各地でおこなわれる「女性に対する暴力撤廃16日間国際キャンペーン」に参加し、シンポジウム開催などの活動を行う。

活動の実施経過

① 「ジェンダーカフェ」の実施

●第1回：「なでしこ JAPAN 大活躍！女が差別される時代じゃなくなったってホント？」

日時：2011年9月23日 場所：カフェ・イココチ

帰国後テレビ出演時に「彼氏はいますか？」「結婚はしたいですか？」などの質問をされたワールドカップで初優勝した日本女子サッカーチーム。世界経済フォーラム発表のジェンダーギャップ指数における日本のランクを見ながら、本当に日本から女性差別はなくなったのかについて学び合った。ゲストスピーカーにお招きした国際基督教大学教員の田中かず子さんからは、「このような企画が若い人から生まれたことがとても嬉しい。同世代の女性たちがまず繋がって楽しい運動をつくってほしい」とコメントをいただいた。

●第2回：「戦争って遠い昔のこと？——14歳の女の子が経験した戦争」

日時：2011年11月23日 場所：一粒のたね

ジェンダー暴力と闘う16日間キャンペーンの関連企画として戦争と女性の権利について学

ぶワークショップを開催した。14歳で日本軍の「慰安婦」とされた女性が描いた絵とストーリーを見ながら進められるワークショップでは、参加者から「いろんな感情が揺さぶられた」「今まで知らなかったことがたくさんあったことに気がつけてよかった」等の感想をもらった。

●第3回：「『結婚した〜い!』と『結婚は諦めた…』私たちの未来の選択肢ってそれだけ？」

日時：2012年1月26日 場所：かまいキッチン

20代後半から30代の女性がターゲットのファッション誌でよく見かける「婚活」や「結婚」特集を見ながら、参加者の「結婚」についてのイメージや日本の結婚制度に関する法律の問題点などを話しました。自分の親や親戚を気にして結婚の選択をしようとしている人が多く、まだまだ「結婚」が当たり前の世の中で生きている若い世代の女性たち、結婚だけに翻弄されることのないように生きていきたいと話した。

●第4回：「就職できないのは私が悪い？ 若い女性の就職活動事情」

日時：2012年3月20日 場所：かまいキッチン

長く続く就職活動期間や女性への差別的な質問が未だに繰り返されている面接のことなど、参加者の就職活動の体験や、女性だから苦労した／している悩み、変だと思えることをテーマに参加者の想いを共有した。厳しい現実に参加者が暗くなってしまう場面もあったが、ゲストの伊藤みどりさんからは「今の若い人たちは辛い時に生きているからこそ、そこに希望がある気がする。辛い経験を共有しているみんなが繋がって、カッコ良く生きて行って欲しい」とコメントをいただいた。就職活動だけでなく、女性が働くということについてみんなが感じている日頃の悩みを共有した場所となった。

●第5回：「産婦人科って誰のためのもの？」

日時：2012年5月17日 場所：かまいキッチン

産婦人科へ行った体験談や避妊の話までを語り合った。フランス出身の参加者によれば、「ピルをもらいに行くところ」、「20歳になればみんな行ったことはある」と、産婦人科へ行くことがあたりまえのこととして受け入れられているよう。一方で「赤ちゃんを産むまで行かなくてもいい所だと思っていた」「妊婦が多いところ」と、産婦人科へ行くことにはなんだかやましい印象があるという声も聞かれた。参加者の生の声を聞けたことで、産婦人科がどんな場所か知る機会だけでなく、自分の体をもっとちゃんと大事にして、向き合っていこうと気づかされる貴重な回だったと参加者からコメントをもらった。

② 平和・人権運動について英語で学ぶセミナー・ワークショップの開催

A) 英語セミナー「アメリカの大学生がつくった性暴力反対運動ガイドを読む」（2011年8月18日-11月24日）

このセミナーで使用した教材は、大学のキャンパスから性暴力をなくすために活動しているアメリカの学生たちの全国組織「SAFER」が作成した学生向けの社会運動ガイド。自分の

学校で性暴力に反対する運動をたちあげ、大学側と交渉するために社会運動の重要なポイントや具体的なヒントについて解説している。全 8 回にわたるセミナーでは、英語のテキストを読解しながら、日本における運動の状況と照らしあわせて話し合った。

●第 1 回：イントロダクション

自己紹介後、教材を作った団体「SAFER」の活動と理念について読んだ。ジェンダー、人種、セクシュアリティなど多様な抑圧に反対する立場から、持続的な社会変化を生み出す草の根運動をつくるためのツールということに参加者で共有した。

●第 2 回：環境を知り、計画を立てる

運動を始める前に、コミュニティの環境をよく知り、何を変えたいのか、なぜそれが必要なのか、誰にはたらきかけるのか、戦略を立てる必要について学んだ。「権力を預かっている人たちに説明責任を果たさせる」という民主主義の基本も確認した。

●第 3 回：日本のキャンパスセクハラ対策について知る

この回では、日本の「キャンパスセクハラ」に関する問題や法律、運動について、「キャンパスセクハラ全国ネットワーク」武田万里子さんを特別ゲストにお招きしてお話をうかがった。

●第 4 回：多様性のある仲間づくり

一緒に活動する仲間集めについてと、民主的で効果的な運動をするためにも男性やマイノリティを含む多様な人々が参加できるグループをつくることと、「無関心」「忙しすぎる」という、参加しない人たちの理由について考えた。

●第 5 回：運動の中の抑圧と特権

民主的で効果的な運動をつくる上で妨げとなる、性差別、人種主義、健常主義、ヘテロセクシズムなど、多様な要素が絡み合った抑圧について理解し、自分たちがもっている特権を手放していくために、「やるべきこと」「やってはいけないこと」を確認した。

●第 6 回：パワー（権力）と権威

非民主的なパワーにもとづく権威に対して、進歩的な運動が対等に交渉するには、民主的な方法によって集合的パワーを高めることが必要。一方で、運動の中に、非民主的な権威を作り出さないようにすることも重要。権威と効果的な交渉を行うためのポイント、気をつけるべき具体的なヒントを学んだ。

●第 7 回：戦略を選ぶ

めざす目標を達成するために、権力構造の内側からはたらきかけるか、外側からはたらきかけるか。ロビーイングや署名活動、デモ、組織間の連携、市民的不服従まで、さまざまな戦略・戦術と、気をつけるべきポイントについて学んだ。

●第 8 回：困難を克服する

攻撃にあうのは、運動が成功の軌道に乗ってきている証拠。恐れすぎずに備え、賢く対処するために、攻撃的な質問のさばき方や、サバイバーへの配慮、を学んだ。

B) 英語セミナー「映像で見る OCCUPY と世界の運動実践」 (2012年1月23日-3月12日 全5回)

このセミナーでは、アメリカの「ウォールストリートを占拠せよ」運動など、世界各地のストリートで起きている社会運動の映像や画像を見て、運動を活性化させるとともに、女性やマイノリティにひらかれた場をつくり、真のデモクラシーを実践するための試みについて話し合った。海外の映像や資料を見て、その後日本語でのディスカッションをするという方法で進めた。

●第1回 テーマ：「OCCUPY (占拠)」運動とは？

日時：2012年1月23日 19:00~21:00

参加者の皆さんの関心を確認し、ナオミ・クラインアメリカのウォールストリートから始まった「Occupy (占領)」運動とは、どのように始まり、「ウォール街を占拠せよ：今世界で最も重要なこと」どんな運動なのかをナオミ・クラウンのスピーチ映像を見ながら学んだ。

●第2回 「ストリートを公権力から取り戻し、自由な空間をつくりだす」

日時：2012年2月6日 (月) 19:00~21:00

警察の規制に対して、自由な公共空間を守り、運動を活性化させる、路上パフォーマンスなどの楽しい試みを映像でみた。

●第3回 「運動の場を多様で民主的にする実践」

日時：2月20日 19:00~21:00

人間マイクロフォン、全員参加型の総会 (general assembly)、ファシリテーター (進行役) の役割、意思表示の方法等の映像を通して、Occupy 運動における直接民主主義がどのように実践されているかを見た。

●第4回 「セイファースペース」

日時：3月5日 (月) 19:00~21:00

多様なジェンダーやセクシュアリティの人々にとって運動の場をより安全なものにするための試みについて、オーストラリアのアナキストグループが作ったポリシーや、LGBTI の集まる「キャンプベティ」でのセイファースペースのとりくみなどを学んだ。

●第5回 「多様性の中の統一」を実現するには？

日時：3月12日 19:00~21:00

これまで紹介したとりくみの中で、身近な運動と共通する点の大きいものはどれか、これまで紹介したとりくみの中で、試してみたいものはどれだったか、参加者の取り組みがそれぞれ異なる中で、たとえばどのような共通の課題をつくるのが、どのような獲得やメリットがあるかについて意見交換して終了した。

C) 英語ワークショップ「家族ってなに？ 女/男って？ ジェンダーとセクシュアリティの関係さをぐる」 (6月22日-7月27日 全4回)

フェミニズム、クィア、LGBT 運動に長く関わり、DJ、パフォー マンスアーティストとして、ジェンダーとセクシュアリティの規範を問い直し、大学などでも差別やハラスメント防止教育に関わってきたスウェーデン出身のミー・パーソン (My Person) さんを講師にお迎えし、家族や結婚の意味について考えてみることから、ジェンダーとセクシュアリティの関係をさぐるワークショップを開催した。

●第1回 イン트로ダクション Introduction

日時：2012年6月22日

第1回目は、セミナーの進め方や参加者の期待・関心を確認したあと、ジェンダー、セクシュアリティ、シスターフッド、エンパワーメントなど、いくつかの大事なコンセプトについて確認した。

●第2回 家族とは？誰が家族なの？ What is a family? Who counts as family?

日時：2012年6月29日

フェミニズム運動やクィア運動は、伝統的な「家族」の概念を問い直し、広げたり、変えようとしてきた。自分にとって「家族」とは誰か、それはなぜか、「家族」は時間とともにどう変化したかを考えてグループでわかちあい、異なる家族のかたちや選択についてディスカッションを通して考えた。

●第3回 結婚、誰にとって、なぜ重要なのか？ Why does marriage still matter?

日時：2012年7月20日

なぜ結婚はいまだに重要な問題なのか。アメリカのオバマ大統領が最近、同性愛者の結婚を支持したことは、何を意味するのか。東京ディズニーランドが同性カップルの結婚式を受け入れるようになったことを題材に、特定のセクシュアリティのあり方や、特定の人間関係だけが承認され特権をあたえられることで、何が起きているのかを話しあい、結婚から見える社会の規範について考えた。

●第4回 一緒に変化を起こすために How do we make changes?

日時：2012年7月27日

最終回では、これまで学び考えてきたことを実践にうつすためのステップを考えた。世界中で起きているさまざまなアクションを知り、みんなの力で変化を起こすために何ができるのか、さまざまな方法を話し合った。

D) 団体運営の実践課題に関する講演とワークショップ

日時：2012年7月21日 場所：渋谷区女性センターアイリス

「フェミニスト団体の運営と実践」をテーマに、マレーシア出身のフェミニスト活動家スザンナ・ジョージさんの講演とワークショップを行った。約20年間、フェミニスト運動にかかわってきたスザンナさんは、自分自身も直面してきた団体運営の悩みについて考察するために、フィリピン、インドネシア、日本の3か国で、計1年間の調査を行ってきた。調査結果をもとにフェミニスト団体運営の課題について問題提起をしていただき、日本で

運動にかかわる私たち自身で課題を話し合うために、スザンナさんのファシリテーションで、参加者のみなさん自身が話したいテーマを決める「オープンスペース・ワークショップ」という新しい手法を実践した。

③ 「女性に対する暴力撤廃 16 日間国際キャンペーン」への参加

11/25（金）から 12/10（土）までの 16 日間に世界各地で女性に対する暴力撤廃を訴えて行われる「ジェンダー暴力とたたかう 16 日間キャンペーン」でアジア女性資料センターは、今年のテーマ「軍事主義と女性に対する暴力」を日本の文脈で深めるため、さまざまなイベントを開催した。ユースプログラムとしては、シンポジウム「ノーベル平和賞のメッセージとは？ ジェンダーの視点から考える『平和』と『安全』」に協力、そして核・原発・戦争の問題を身近なファッションを通して考える「Fashion Resistance to Militarism『核・原発・戦争・平和を着る』」を開催した。

●シンポジウム「ノーベル平和賞のメッセージとは？ ジェンダーの視点から考える『平和』と『安全』」（11月25日）

秋林こずえさんの基調講演では、「人間の安全保障」や国連安保理決議 1325 号など、ジェンダーと平和に関する国際的な議論の進展と、その後の課題について概観し、さらに「福島」と「沖縄」のつながりについて指摘がなされた。さらに、被災地における女性の「安全」に関する柘植あずみさんのお話、また、「福島避難母子の会 in 東京」のみなさんのお話を通して、「3.11」後の日本において、「安全」がいかに操作の対象とされているかが見えてきた。

●「Fashion Resistance to Militarism『核・原発・戦争・平和を着る』」（12月10日）
アメリカの女性グループが考案した、日常の中の軍事主義を問い直すツールとしてのファッションショーというアイデアに刺激を受けて、アジア女性資料センター・ユースグループでは、核・原発・戦争・平和をテーマにしたファッションショーを企画した。プロのスタイリストやボランティアのモデルさんたちの協力を得て、軍事主義と切り離せない原子力の平和利用や、便利な暮らしの背後にある問題をファッションで表現。フィナーレにはカラフルなバナーで平和への思いを表現した。

活動の成果

① 「ジェンダーカフェ」

初回の参加人数は 7 名だったが、その後、回を重ねるごとに参加人数が増え、最終回までの全体の参加人数はのべ 46 名となった。参加者も学生から様々な職業の女性達が集まり、それぞれの体験を共有し合えた。「身の回りにあるジェンダーの問題について安心して話せる人や場所がない」と話す参加者が多く、参加者にとって貴重な時間になったことを実感した。今後もこの取り組みを続けて欲しいという声が多く聞かれたため、今後も発展的に継続していける事業となった。

② 英語ワークショップ

この助成を通じて開催することができた連続セミナーとワークショップには、1年を通して全体でのべ100名程度が参加した。うち、ターゲットグループである20～30代の女性は全体の約半分と、通常のセミナーよりも割合が高く、助成により若い世代の参加費を低く抑えることができたことで、新しい層の参加をうながすことになったといえる。

これらのセミナーとワークショップでは、海外の若い世代が中心となっていて行っている運動実践を紹介しながら、人権と非暴力、社会正義のための社会運動を一からつくっていくための基本的な原則や具体的な実践をとりあげたが、これは日本の若い世代にとっても興味深い教材であり、自信とモチベーションを高める効果があったことが、期間中のディスカッションや、終了後の感想からうかがわれる。いずれの回においても、参加者は、セミナーで学んだ実践を、自身の活動に生かすことについて高い意欲を見せた。また、これまで社会運動に長年かかわってきた、比較的上の世代の参加者にとっては活動実践をふりかえる機会ともなったため、社会運動の経験が少ない若い参加者との間で活発な会話が交わされ、経験を共有する機会が生まれたことは、予期せぬ効果であった。

3回のセミナーは、それぞれ、テキストの読解を中心としたもの、映像を中心としたもの、会話を中心としたもので構成され、3つを通して英語力の総合的な向上につながるようにした。また講師も、英語だけでなく、教材の背景にある社会運動について詳しい知識と経験をもつ者があつたことで、人権と平和のための具体的な取り組みについて、参加者の活発な議論をうながし、知識を補足することができ、参加者の満足度も非常に高かった。

「アメリカの大学生がつくった性暴力反対運動ガイドを読む」では、実際にキャンパスから性暴力をなくす活動をアクティブに行っているアメリカの学生達のグループがつくったテキストを使うことで、実践的な英語力が身についたと感想をもらっている。またアメリカと日本の状況を比較することで、性暴力についての取り組みや、運動の広げ方等、日本で私たちができることを参加者で活発にディスカッションしたことで、今後につながる具体的な活動のアイデアもいくつか出ている。このガイドの日本語版を制作したいという案は今後実施の方向で検討する。

「映像で見る OCCUPY と世界の運動実践」では、実際の映像を見ながら実際の英語での会話を耳にすることで、運動の場面に実際のコミュニケーションで使われている英語の表現を知ることができた。人権や平和の為に活動する海外の運動家のスピーチ映像も多数用意したので、多くの大衆を目の前に訴えかけるスピーチに使える英語表現も学ぶことができた。ディスカッションでは参加者が今後、映像を使った人権啓発活動にも取り組みたいという声も聞かれたので、今後若い世代を中心に映像制作の技術等を学ぶワークショップ等の開催も検討する。

「家族ってなに？ 女／男って？ ジェンダーとセクシュアリティの関係をさぐる」では、参加者のディスカッションも英語で進めた。英語でコミュニケーションをとる機会の少ない参加者は覚えた表現を実際に使うことができたので、実践的なトレーニングの機会とな

った。

このセミナーで得た知識をどのように実践するべきか活発なディスカッションも行われた。セミナーで学んだ経験を各自持ち帰り、参加者がそれぞれ関わる学校、職場、地域などで活用することが期待できる。また今回のプログラムを通して今後のアジア女性資料センターに期待するセミナー案や企画案も参加者から多く出されたので、今後の活動に活かすことができる。

③ 16日間キャンペーン

シンポジウムにはプログラム参加者から計6名が開催に関わった。またプログラムの参加者が中心のアジア女性資料センター・ユースグループで独自の企画「Fashion Resistance to Militarism『核・原発・戦争・平和を着る』」には20代を中心とした女性達計20名がボランティアで参加した。ファッションを通して人権と平和を訴えるというアジア女性資料センターにとって初めての試みには、これまでアジア女性資料センターについて何も知らなかったという若い世代もボランティアや観客として関わりを持つことができたので、今後の繋がりにも期待できる。参加者は全体で60名となり、16日間キャンペーン自体の目的である女性に対する暴力撤廃への意識啓発という意味でも多くの人々に訴えることができた。

今後の課題

・このプログラムを通して、人権や平和に関心のある若い世代の女性たちがつながり、知識やモチベーションを高める機会が得られたことは大きな成果であった。ここから、さらに具体的な活動に積極的に参加しようとしている参加者もいる。しかし一方で、その後の活動にかならずしもつながっていない参加者もあり、より具体的なフォローアップ活動の機会を提供し、継続的なトレーニングができる環境を整えることが課題である。既存の活動に若い世代が活躍できる機会を増やすこと、また、海外での研修機会など、ステップアップのプログラム開発にも今後とりくんでいきたい。

・英語セミナーの参加者の英語のレベルに幅があった。事前または初回に聞き取りフォローが必要な部分を丁寧にしていく必要がある。

・今回、助成金を得られたことにより、金銭面で参加を躊躇していた人たちが参加することができ、人権や平和活動に関心をもっている若い世代が潜在的に多くいることが明らかになった。しかし若い世代の女性たちが活動を継続していくには、依然として金銭と時間に余裕がないことが大きなネックとなっている。今後、常に意義のある質の高い事業を継続して行い助成金や賛同者からの寄付等の収入を安定的に得られるよう努め、金銭的に持続可能なプログラムにしていくことはもちろん、若い世代の時間的な余裕のなさについても、それ自体を課題として解決にとりくんでいくような活動を考えたい。

若い世代の男性についても、ジェンダー視点からの人権教育のニーズがあることがわかったので、対応するプログラムを考えたい。